

抑^{そもそも}源三位入道と申すは、摂津守頼光に五代、
三河守頼綱が孫、兵庫頭仲政が子なり。保元の合戦の
時、御方にて先をかけたりしかども、させる賞にもあづか
らず。また平治の^{げきらん}逆乱にも、親類をすてて参じたりしかど
も、恩賞これおろそかなり。大内守護^{たいだいしゅご}にて年ひさしうあ
りしかども、昇殿をばゆるされず。年たけよはひ傾いて、
述懐^{しゅっかい}の和歌一首詠うでこそ、昇殿をばゆるされけれ。

人知れず大内山^{おおうちやま}のやまもりは

木^こがくれてのみ月をみるかな

この歌によって、昇殿ゆるされ、正下四位^{じやうげのしゐ}にてしばらく
ありしが、三位^{さんみ}を心にかけつつ、

のぼるべきたよりなき身は木^このもとに

しみを拾ひて世をわたるかな

さてこそ三位^{さんみ}はしたりけれ。やがて出家して、源三位
入道とて、今年は七十五にぞなられける。

この人一期^{いちご}の高名とおぼえし事は、近衛院御在位の
時、仁平^{にんぺい}のころほひ、主上よなよなおびえたまぎらせ
給ふ事ありけり。有^う駿^{げん}の高僧貴僧^{こうそうきそう}に仰せて、大法秘法を
修せられけれども、そのしるしなし。御^ご惱^{のう}は丑^{うし}の刻^{こく}ばかり
でありけるに、東三条^{とうさんじょう}の森^{かた}の方より、黒雲一村^{くろくもひとむら}たち来っ
て、御殿の上におほへば、かならずおびえさせ給ひけり。
これによって公卿^{くぎやうせんぎ}僉議あり。

去る寛治^{かんじ}の比^{ころ}ほひ、堀河天皇御在位の時、しかの
ごとく主上よなよなおびえさせ給ふ事ありけり。その時の
将軍義家朝臣^{ぎかのあつそん}、南殿^{なんでん}の大床^{おおゆか}に候はれけるが、御^ご惱^{のう}の
剋限^{こくげん}に及んで、鳴^{めい}絃^{げん}する事三度の後、高^こ声^うに、
「前陸奥守源義家^{さきのむつのかみみなもと}」と名のったりければ、人々皆身の
毛よだって、御^ご惱^{のう}おこたらせ給ひけり。

しかればすなはち先例^{せんれい}にまかせて、武士に仰せて
警固^{けいご}あるべしとて、源平両家の兵者共^{りょうか}のなかを、撰^{つづもの}ぜら
れけるに、頼政をえらびいだされたりけるとぞきこえし。
その時はいまだ兵庫頭^{ひょうごのかみ}とぞ申しける。頼政申しけるは、
「昔^{ちやうか}より朝家に武士をおかる事は、逆反^{ぎやくほん}の者をしりぞ
け、違勅^{いちよく}の者をばろぼさんが^{ため}為なり。

そもそも源三位入道という人は、摂津守頼光から五代、
三河守頼綱の孫、兵庫頭仲政の子である。保元の乱の
時は後白河天皇方につき、真っ先に敵の中に攻めこんだけ
れど、これといった恩賞は与えられなかった。また平治の乱で
も、親兄弟を捨てて平氏に味方したが、恩賞はわずかだっ
た。大内裏を長年警固したけれど、昇殿を許されなかった。
年を重ね老齢になってから、述懐の和歌一首を詠んで、昇
殿を許されたのだった。

人に知られることもなく、大内山の山守ならぬ大内裏

の警護役の私は、木の陰から月を観るように、帝の

お姿を拝見するのだなあ

この歌によって昇殿を許され、しばらく正四位下であったが、
三位に昇進したいと願って、

昇進につながる縁故のない私は、木の下で椎の実を

拾うように、ここで四位のままずっとお仕えするのだなあ

この歌によって三位に昇進したのだった。すぐに出家して、源
三位入道と呼ばれて、今年は七十五歳になられた。

この人が、生涯で一度というほど名をあげたと思われるの
は、近衛院がご在位の時、仁平年間に、帝が毎夜毎夜お
びえ、魂消ることがあった。祈祷をするとすぐれた靈験を現
すという高僧貴僧に命じて、大法秘法を行わせただけれど、
その効果はない。帝がお苦しみになるのは午前二時ごろで
あったが、東三条の森のほうから、黒雲がひとかたまりやっ
て来て、御殿の上を覆うと、必ず帝はおびえなさる。そこで公
卿が対策を話し合った。

去る寛治年間のころ、堀河天皇がご在位の時に、同じ
ように帝が毎夜毎夜おびえなさることがあった。そのころの
将軍、源義家朝臣は南殿（紫宸殿）の大床に控えてい
たが、帝がお苦しみになる時刻になると、邪気を払うために、
弓の弦を手で引き鳴らすこと三度、その後大声で「前陸奥
守源義家」と名のったところ、人々は皆、ぞっとして身の毛
がよだち、帝のお苦しみもなくなった。

それゆえ先例に従って、武士に命じて警固させるのがよい
と言って、源平両家の武士たちの中から探して、頼政を選
び出したということだ。その時はまだ兵庫頭といっていた。
頼政が言うには、
「昔から朝廷に武士を置いているのは、反逆する者をとり除
き、勅命に背く者を滅ぼすためです。

目にもみえぬ変化のものの仕れと、仰せ下さるる事、いまだ承り及び候はず」と申しながら、勅定なれば召に 応じて参内す。頼政はたのみきつたる郎等、遠江国住人、井早太に、ほろの風切はいだる矢おはせて、ただ一人ぞ具したりける。我身は二重の狩衣に、山鳥の尾をもつてはいだるとがり矢二すぢ、滋籐の弓にとりそへて、南殿の大床に祇候す。頼政矢を二つたばさみける事は、雅頼卿、その時はいまだ左少弁にておはしけるが、「変化の物仕らんずる仁は、頼政ぞ候」と、えらび申されたるあひだ、一の矢に変化の物を射そんずる物ならば、二の矢には雅頼の弁の、しゃ頸の骨を射んとなり。

日ごろ人の申すにたがはず、御心の剋限に及んで、東三条の森の方より、黒雲一村たち来って、御殿の上にたなびいたり。頼政きつとみあげたれば、雲のなかにあやしき物の姿あり。これを射そんずる物ならば、世にあるべしとは思はざりけり。さりながらも矢とってつがひ、「南無八幡大菩薩」と心のうちに祈念して、よっぴいてひやうど射る。手ごたへしてはたとあたる。「えたり、をう」と矢さけびをこそしたりけれ。井の早太つと寄り、落つところをとっておさへて、つづけさまに九かたなぞ裂いたりける。その時上下手々に火をともいて、これを御覧じ見給ふに、頭は猿、むくろは狸、尾は蛇、手足は虎の姿なり。なく声鵲にぞ似たりける。おそろしななんもおろかなり。主上御感のあまりに、獅子王といふ御剣をくだされけり。宇治の左大臣殿是を給はりついで、頼政にたばんとて、御前の階をなからばかりおりさせ給へるところに、比は卯月十日あまりの事なれば、雲井に郭公二声三声音づれてぞとほりける。その時左大臣殿、

ほととぎす名をも雲井にあぐるかな

と仰せられかけたりければ、頼政右の膝をつき、左の袖をひろげ、月をすこしそばめにかけてつ、

弓はり月のいるにまかせて

と仕り、御剣を給はって、まかりいづ。「弓矢をとってならびなきのみならず、歌道もすぐれたりけり」とぞ、

目に見えない変化の物を仕留めよとお命じになることなど、まだ聞いたことがございません」と言いながらも、帝がお決めたことなので、お召しにに応じて参内する。頼政は、厚く信頼する家来の、遠江国住人、井早太に、翼の下のほろ羽のうち、風切り羽をはいだ矢を背負わせて、ただ一人連れてきた。自分は、表裏同色の狩衣に、山鳥の尾ではいだとがり矢を二本、滋籐の弓に添えて持ち、南殿の大床に控えた。頼政が矢を二本たずさえている理由は、雅頼卿が、そのときはまだ左少弁でいらっしやったが、「変化の物を仕留めるのは、頼政でしょう」と推薦したので、一の矢で変化の物を仕留め損なったら、二の矢で雅頼の弁の奴めの頸の骨を射ようと考えたからである

ここ数日、人が言っているとおり、帝がお苦しみになる時刻になると、東三条の森のほうから、黒雲がひとかたまり近づいてきて、御殿の上にたなびいていた。頼政がキツと見上げたところ、雲の中にあやしい物の姿がある。もしこれを射損ねたら、生きていられるとは思えない。しかしながら、矢をとって弓につがえ、「南無八幡大菩薩」と心の中で祈念して、矢をひきしぼりヒューツと射る。手応えがあつてはたと命中する。「仕留めたぞ、おう」と声をあげたのだった。井早太がずっと近寄り、落ちてくるところを取り押さえて、続けざまに九回切り裂いた。その時、身分の高い者も低い者も、手に手に松明を持って、これを見ると、頭は猿、胴体は狸、尾は蛇、手足は虎の姿である。鳴く声は鵲に似ていた。恐ろしいという言葉などではとても言い表せない。帝はとても感激なさつて、獅子王という剣をお授けになった。宇治左大臣、藤原頼長殿がこの剣を取り次いで、頼政に与えようとして、御前の階段を中ほどまで下りたところで、頃は四月十日すぎのことだったので、郭公が二声三声鳴いて空を飛んでいった。その時、左大臣殿が、

ほととぎすが鳴きながら空を飛んでいくように、

あなたの評判も宮中（雲居）で高まりましたね

と詠みかけたので、頼政は右の膝をつき、左の袖を広げ、月を少し横目で見ながら、

弓張り月が自然に山陰に沈む〈入る〉ように、ただ

弓矢にまかせて射るだけでした。

と詠み、剣を頂戴して退出した。「弓矢の腕前では肩を並べる者がいないというだけではなく、歌道にも優れていたのだな」と

君も臣も御感ありける。さてかの変化の物をば、うつほ
舟にいれて、ながされけるとぞきこえし。

去る応保のころほひ、二条院御在位の時、鵲といふ
化鳥、禁中にないて、しばしば宸襟をなやます事ありき。
先例をもって、頼政を召されけり。比は五月廿日あまり
のまだよひの事なるに、鵲ただ一声おとづれて、二声とも
なかざりけり。目さすとも知らぬ闇ではあり、姿かたちも
みえざれば、矢つぼをいづくともさだめがたし。頼政 は
かりことに、まづ大鎧をとってつがひ、鵲の声しつる内裏
の上へぞ射上げた。鵲、鎧の音におどろいて、虚空に
しばしひひめいたり。二の矢に小鎧とってつがひ、ひいふ
つと射きって、鵲と鎧とならべて前にぞ落としたる。禁中
ざざめきあひ、御感なのめならず、御衣をかつけさせ給
ひけるに、その時は大炊御門右大臣公能公これを給は
りついで、頼政にかづけ給ふとて、「昔の養由は、雲の外
の鴈を射き。今の頼政は、雨の中に鵲を射たり」とぞ感ぜ
られける。

五月闇名をあらはせるこよひかな

と仰せられかけたりければ、頼政、

たそかれ時も過ぎぬと思ふに

と仕り、御衣を肩にかけて、退出す。

その後伊豆国給はり、子息仲綱、受領になし、我身三
位して、丹波の五ヶ庄、若狭の東宮河知行して、さてお
はすべかりし人の、よしなき謀叛おこいて、宮をも う
しなひ参らせ、我身もほろびぬるこそうたてけれ。

帝も臣下も感動なされた。そしてあの変化の物は丸木舟に
入れて流したということだ。

去る応保年間、二条院がご在位の時に、鵲という化鳥
が内裏で鳴いて、しばしば帝の眠りを妨げることがあった。先
例に従って、頼政をお召しになった。頃は五月二十日すぎ
の、まだ夜に入ってすぐの時間だったが、鵲はたった一声鳴
いて、二声とは鳴かなかった。目を刺しても分からないような
闇ではあり、姿かたちが見えないので、的を定められなかつ
た。頼政は思案して、先ず大きな鎧矢を取って弓につがえ、
鵲の声がした内裏の上の方に向けて射た。鵲は鎧矢の音
に驚いて、空中でしばらくヒヒッと声をあげた。二本目は小さ
い鎧矢を取って弓につがえ、ヒューッと射て、鵲と鎧矢を同
時にみんなの前に落とした。内裏はざわめき、帝のご感動は
並々ではなかった。帝がお召しになっていた着物をお授けに
なると、その時は大炊御門右大臣公能公がこれを取り
次いで、頼政に与えようとして、「昔の養由は、雲の上に
いる鴈を射た。今の頼政は、雨の中に鵲を射た」と感動を伝
えた。

梅雨の夜の暗闇の中で、あなたの名を

世に知らしめた今宵ですな

と詠みかけたので、頼政は、

誰なのか、名もわからない夕暮れ時も過ぎてしまった

と思いますのに。

と詠み、御衣を肩にかけて退出する。

その後、伊豆国をいただき、息子の仲綱を国司にして、
自らは三位となって、丹波の五ヶ庄、若狭の東宮河を治め
て、そのまま暮らしていけばなんの苦労もなかった人が、つま
らない謀反を起こして、それによって高倉宮（以仁王）も
命を落とされ、自分の身も滅ぼしてしまったのは、おろかなこ
とであった。